

裏面の話題

みんなの居場所の裏面は、小学生にとって必要ではないかと思う問題、漢字、語、慣用句等々を載せていきます。ご家族の団らんの話題にしてみてください。会話が広がります。

令和8年1月13日(火)

みんなの居場所

学校の大切な役割「社会性の育成」①

さて、現任学習指導要領は「子ども達が未来社会を切り拓くための「何ができるようになるか」を目指すものを体系的にまとめたもの」と。「主体的・対話的で深い学び」の実現のため「この学びに学び」を強く求めています。本校では「主体的・対話的で深い学び」を「主体的・協働的で深い学び」と捉え、他者との協働的な学びをこのを前面に押し出した学習活動を展開しています。

このような授業改革や協働活動の展開によって、我々は今後の学校の在り方を自ら目指して日々歩みを進めているのですが、在るべき学校の姿は授業だけではありません。学校が担う役割は学力育成だけではなく「ルール的重要性」「思い出しつくり」「社会性を育む」等々、数え上げればきりがありません。今日、この3つを挙げた「社会性を育む」ということについて述べてみたいと思います。

私はこれまで高学年担任が多く、その中でも6年生の担任が最も多かったです。これは6年生への飛び込みの担任が多かったことを意味しています。私はこの経験により、担任としての仕事、パフォーマンスについての評価は1年のスパンで行うようにしました。その結果、私は1年間全力投球の癖がつき、良い事づくめでした。他の先生からは「折角1年間回数を回すのに、子ども達との関係も良好だから2年間受け持たない」という理由も聞かれましたが、それは教師側の理由です。私も持ち上りの担任の経験もしたことが、逆に子ども達の立場からは別の教師との出会いが与えられなかったという見方もできます。更に、「クラス替え」ということも考えてみましよう。府本小の小さな小学校ではクラス替えは無く、6年間、固定された人間関係のままで卒業を迎えることも多く、多くの同級生の中で育まれる社会性の発達にも、多少の影響が出来ます。今では「毎年クラス替え」というシステムが主流になっていますね。私は、飛び入り担任が多かったせいか、毎年クラス替えの方が子ども達にも教師にも良いような気がしています。社会性の発達という視点から考えると、多くの人は出会い、その中から人々へでも「上手にやっていた」ということを学ぶような気がします。私は、1年しか担任できなかった多くの子ども達を保護者へ、今でも密な付き合いをしています。

卒業前線 ～中学校とは～

「欲求制御力」を身に付ける

家庭でもよくある場面の話です。テレビを観たり見ているあるあるゲームをしている時に、「勉強はしたわ、ほめさせてね」と言っていると「今このゲームの思ったのになあ、あ、やめななななな」と「屁理屈をこねる保護者の態度にこのように最終がある方もいらっしゃると思います。

さて、「冒頭」「欲求制御力」とは要するに「我慢強さ」です。「時間を制御する能力」というのもいいでしょう。中学生になれば「ゲームしたいけど、今は我慢して勉強しよう」というように、我慢が必要なきは自らの意志でなければなりません。例えば、定期試験の数日前には部活動等も中断され、普段より早めに帰宅できるものになります。この時「ふー、やめやめ」と考える子どもは少なくないか。「ゲームをやる子どもは成績に差がつくのは明白です。私の場合は後者に近かったので苦労しました。一夜漬けの知識は殆ど定着しません。小学生のうちから1日の時間の管理を任せたりすることは大変有効です。卒業までの時間を利用して、子ども達に積極的な時間管理をさせてみるのもいいですね。

6年生では、卒業までのカウントダウンも始まっている様子。残り少ない小学校生活の中で中学への準備をしておく、中学生活への慣れもスムーズだと思います。有意義な時間を過ごして欲しいです。

シリーズ「自分を語る」#66

平成16年の11月頃だったでしょうか、学童オリンピックの団体戦に出る機会になりました。男子はもともと人数も少なかったので大会そのものに出られるかどうかというところでしたが、学生混合でチームを作り、正に「参加する」という意識がある、状態でも出場しました。それに反し、女子チームは数少ないといいますが、学童オリンピック個人戦で全員がハスト4に残るような勢いでいたから、ひょっとすると優勝狙えるかも、なんて思いながら大会に出場しました。

案の定、男子は一回戦負けでした。仕方ないと言えは仕方ないですけど女子は連勝して「ブレイク」その後女子チームを応援しました。女子チームは順調に勝ち進み、ハスト4まで来ました。その時、「記談交」のこの話をしています。

「勝ったらハスト4だね。決勝に出られたら3位決定戦があるけれど優勝チームと同じ回数試合ができるというタイプ。」

まさかこれが本場のことになるとは。実際、準々決勝はハスト1で快勝でした。「ハスト4」の響きに酔っていましたねえ、この時はやはり、学童オリンピックは当時の大会の最高峰だったと思います。しかも団体戦です。個人のスキルだけではなく、全体のスキルや心の繋がりが、信頼関係が試される大会といってもいいかもしれません。その大会でハスト4ですか。

いよいよ準決勝です。相手は県南の強豪です。メンバーの中に個人戦で優勝した選手がいました。この選手には負けるといつことを前提にせざるを得ません。しかしシングルスタブルに勝てば良いのですから、どちらかにいつにどちらに分がありそうでした。そこにスキが生じたのもいいかもしれません。

ちやうど、当時の熊田学童オリンピック団体戦について覚えている範囲でシステムを紹介しましょう。第1シングル、第2シングル、ダブルスの3試合で雌雄を決します。3試合のうち2試合を取った方が勝ちです。このうち2人、2人ないし3人、スキルが高い選手がいれば勝つことができるのです。当時のメンバーは5・6人スキルが高かったのですが、全員も充実していました。私の心の中に「多分勝てる」という慢心があった、今になんか思います。また、対戦オーダー表は直前に提出するというのがシステムでしたから、組み合わせによっては負けの可能性も十分にあった訳です。そういう「欲」だか「邪」な考えには、いい結果はついてきませんでした。気もななな私の意識は、当日の子ども達の体調の精神的な状態まで、しっかりと把握することができていませんでした。実はこれがとても大切なことなのです。そのような状況の中で試合開始です…、結果は如何に…。(つづく)